なぜ支援の営みにエピソード記述が必要なのか（追加資料）

京都大学名誉教授　　鯨岡　峻

１．二つのエピソード記述から気が付くこと

（１）事例に関わるエピソード記述には、ある程度の時間幅がどうしても必要になる

１）本人と支援者が出会うまでの背景情報が必要

⇒多くの場合、支援者が本人と出会うまでに相当の時間が経過している。
その時間経過の中で本人がどのように育てられて育ってきたかについての情報が得られないと、支援者は利用者本人にどのような構えで接すればよいかが見通せない。

⇒最初の出会いのときは、ほとんどの場合、互いに見知らぬ人として出会うことになる。利用者本人は、出会っている人が自分の支援者なのだという理解は、たいていの場合にまだ無いことが多い。

⇒本来の意味での支援という関係性の中に二人(利用者本人と支援者)が入るためには、少なくとも支援者が利用者本人にとって、「怖い人」「寄り付きがたい人」ではなくなっていることが必要である。

⇒さらに言えば、二人のあいだに「穏やかで優しい雰囲気」が生まれていることが必要である。

⇒そこから考えれば、支援の関係に入るということは、ほとんど臨床の場における臨床家と来談者との関係性に引き移して考えることができる。

⇒「支援する―支援を受ける」という関係が成り立つためには、相当の時間が必要だということである。

⇒この問題意識は、ティーチやABAに沿って支援を考える人たちは問題にならないだろう。

⇒金沢さんの場合には、自宅訪問から、支援する関係に入るまでに１５時間を要している。

⇒掃部さんの場合は年単位を要している。

⇒そこに支援を考える上での重要な意味があると思う。短時間にさっと関わって、本人になすべきことをさせるというふうに支援を考えているなら、それは間違いで、プログラムや技法中心にして支援を考えることの問題は、上記の事にあると言ってもよいのではないか。

（２）ASDのある人が出会いの場で示す様々な状態像は、ASDという障碍そのもののように見えｚが、実際のところ、それは出会いに至るまでの本人が経てきた対人関係のねじれや軋みのなかで創られた「関係性の障碍」を随伴したものであるという理解が重要である。

⇒本人が一個の主体であるという理解が、出会いの場で支援者に無ければ、支援はその端緒にも付けないだろう。

⇒（１）で時間経過を捉えることが必要だとのべたのは、このことにも関わる。

⇒金沢さんの事例も、掃部さんの事例も、最初の頃は強度行動障碍と評価されるような状態像ではなかった。というよりも、むしろかなり高機能な面を持っていた人だったように思う。それが強度高度障碍の様相を呈するようになった事の裏には、掃部さんの事例に明らかなように、幼少の頃から、両親の良かれと思う様々な働きかけがあって、それが本人の

意に沿わないものであったことから来る、さまざまな負の体験が積み重なって、次第に強度行動障碍の様相を見せるようになった可能性が窺える。

⇒その状態像を変えるための本質的な対応は、支援者側の働きかけというよりも、むしろ本人が自分の意思で動いてよいのだと思えるようになり、それを支援者が感じ取り、利用者本人の思いに寄り添えるようになることが、支援に向かう第１歩ではないか。

⇒この点は二人のエピソード記述に共通している点であると思う。午後に見るティーチやABA の技法は、これとは考え方が全く異なっている。

（３）二つのエピソードとも、利用者本人と支援者のあいだで、僅かであれ、気持ちが通じ合う、分かり合えると支援者に感じられる「瞬間」がある。これがそれぞれのエピソードにおいて、支援が大きく動く「瞬間」である。

⇒その「瞬間」は支援者が感じ取った自分の「体験」として語る以外に、第三者にその「体験」を伝える術はない。そこに「エピソード記述」が必要になる理由がある。

⇒この支援者の「体験」は支援者の体験であると同時に利用者本人がおそらく感じていたであろう「体験」でもあるだろう。通じ合える、分かり合えるとは、二者間の関係性が変化するという重要な意味をもつものである。

⇒この支援者の体験を利用者本人に通じるものがないまま、二人の関係性が良好な方向性を持つようになることはあり得ないのではないか。この点は支援をどのように考えるかを左右する大きな論点である。

⇒実際、二つのエピソード記述とも、支援者のこの「体験」の後に、利用者本人の側に目に見える前向きな変化が現れているように見える。従って、この支援者の「体験」が或る意味で、本格的な支援の開始を告げるものだと言えるかもしれない。

⇒このように記述されたエピソードがこれから多数、積み重ねられていけば、支援を理解する上にも、また新たに出会った事例を深く理解する上に必ずや役立つはずである。

⇒ティーチや ABA の技法は、それが一時期上手くいくように見えても、上に見たような支援の長期間に亘る時間経過の中での、支援者―利用者の関係性の変容を手応えあるかたちで描き出すことにはおそらく繋がらないだろう。

２．なぜ支援の営みにエピソード記述が必要なのか

これについては、今まで述べてきたことがその答えになっていると思われるが、あえてポイントを整理すると次のように言えるだろう。

（１）利用者本人を真に「主体」として理解しようと思うならば、その内面（心の動き）に目を向けることが欠かせない

⇒行動中心に考える立場は、本人の内面を取り上げる枠組をもたない

⇒「本人主体」という文言を支援者はよく使うけれども、主体とは何かという問いに応える理論的な土台を持ち合わせていないなら、それは空文句である。

⇒私は主体概念を長い時間をかけて磨き上げてきた、今回の新著でも私の理解する限りでの主体概念が取り上げられている。この主体概念がしっかり理解できなければ、真の「本

人主体」は語り得ないと言っても過言ではない。

⇒本人が言葉を話すか話さないかに拘わらず、本人の内面には必ず正負の「心の動き」を抱え込まれている。利用者本人に寄り添うことのできる支援者は、それを感じ取ることができる。

⇒ここに、支援者には人間としての構え（他者を理解しようとする姿勢、態度）がどうしても必要になる。支援者養成を考えるとき、このことが中心に来ないような支援者養成の在り方は、本来、問題外である。

（２）支援者は、単に技法を利用者に振り向ければ支援が成り立つのではなく、利用者本人の内面に人間らしい心が動く（こうしたい、こうしたくない、これが分かってほしい、等々と心が動く）のを把握できるようになることが、支援の第一歩になるという理解が是非とも必要である。これは支援者養成の要になる問題である。

⇒利用者を行動の束と考え、その行動の束が増えれば、生活がやりやすくなると考える支援論がこれまで力をもってきたが、今回の二つのエピソード記述を読めば、そのような考えは本来の支援には繋がらないと考えるべきである。

⇒これまでの支援と、これからの支援を二分するものは利用者本人の心の動きを捉える支援者自身の心の動きである。

（３）しかし、これまでの行動科学は、心は目に見えないものであり、数量的に実証可能なものではないという理由で、支援者の内面の心の動きも、利用者本人の内面の心の動きも取り上げるべきものではないという見方をしてきた。

⇒この行動科学の視点に立つ限り、エピソード記述が必要になる理由は見出せない。

⇒行動科学のよって立つ客観主義の立場と、心を問題にする私の間主観主義の立場は、パラダイムが違うものと理解する必要がある。

（４）利用者本人の心の動きは、外側からみて捉えられるものではなく、本人の内面に支援者が寄り添うときに初めて感じ取られるものである

⇒実践的にはこの利用者の内面に「寄り添う」ということが意外に難しい。

⇒支援者の中に、何かをしてあげよう、何かをさせたいというような、利用者を動かそうとする思いがある間は、なかなか寄り添う姿勢にはなれない。

⇒先の二つのエピソード記述は、この点で学ぶべきものが多くあった。寄り添う姿勢が持てなかった状態から、いつしか寄り添う姿勢を持つことができたときに初めて、利用者の内面の動きを掴めるようになり、それが新たな支援者には重要な意味ある「体験」として意識されるようになってくる。

（５）エピソード記述は、利用者と支援者のあいだに生まれた客観的な出来事を描くのではなく、その出来事の中で支援者が体験したことを描くものである。

⇒二つのエピソードとも、そのような描き方になっている。ただ、「何時しか寄り添えるようになる」という流れが、エピソードの読み手にはなかなか伝わらない。そこを何とか描き出すことが、エピソード記述の難しさにも繋がる、しかし、寄り添えた時に得られる支援者の意識体験がしっかりしたものであれば、それは必ずや言葉になると信じても良いのではないか（お二人とも、それ故にこのエピソードを描くことができた）。

（６）エピソードに描かれたものは、描いた本人が理解するだけでなく、他者もそれを読むことに

よって、その内容を理解することができ、また他者の読解を通して、書き手が考えの及ばなかった新たな理解に辿り着くこともあり得る。

⇒寄り添ったところで支援者が利用者本人の下に感じとったものは、いつも絶対に正しいとは限らない。そこには主観が混じる可能性があって、間違った捉え方をすることがあり得る。その間違いに気づくには、他者にそのエピソードを読んでもらって、その内容に関して（手続きや方法ではなく）、気になる点、納得できない点を指摘してもらうことによって、誤まりの可能性を減らすことができる。これがエピソード記述にとっては、一つの真実に近づく道である。

（７）エピソード記述の持っているこのような特徴は、支援が本来持つべき性格でもある

⇒振り返りのない、やりっぱなしの支援は、そこに間違いがあっても気づかれない。

⇒多くの支援者は、支援は利用者本人のためのものであるから支援は間違うはずがないと思い込みやすい。

⇒支援が間違いの道に迷い込んだとき、それに気付き、それを正す道は、普段の支援のありようがエピソードに描かれていて、それをチェックすることができる場合である。それによって初めて、間違った支援を修正することが可能になる、

（８）ここに紹介された二つのエピソード記述は、（１）～（７）に指摘したことをほぼ網羅する内容を持っている。

⇒従って、この二つのエピソード記述は「なぜ支援にエピソード記述が必要なのか」に応える内容を持っていると言える。

今回は、エピソード記述とはどういうものか、エピソード記述の元になる「関与しながらの観察」の方法論とはどういうものか、については、取り上げることができなかった。